5章

これからの景観アセスメント

田中　章

「景観」と「ランドスケープエコシステムズ」

最近，HEPの話ばかりなので，今回は違うことをお話してみたい．2006年9月1日～3日に武蔵工業大学環境情報学部（横浜）で開催する第5回環境アセスメント学会大会（http://www.jsia.net/）のシンポジウムテーマでもある「景観」についてである．

「景観」とは一体，何なのか．国語辞典には「景色，眺め．特に優れた景色」とある．土木の視点から中村良夫は「景観とは人間をとりまく環境の眺めに他ならない」とした．残念ながら景観緑三法にも環境影響評価法においても景観の定義はない．今日の日本では，「景観」は「人が見た眺め」という意味で使われている．筆者はこのような皮相的な日本の「景観」の概念について常々疑問を感じてきた．「景観保全」という言葉がある．「景観」が視覚的で皮相的なものならば，「景観保全」もうわべだけのものになるだろう．武内和彦（2004）は「わが国の景観論は視覚的認知の段階にとどまっている」と指摘している．美しい日本の景観を守るために景観アセスメントはどうあるべきなのだろうか．

ところで，欧米ではランドスケープアーキテクチャー（Landscape Architecture）という専門領域が昔から盛んである．「Landscape」を英和辞典で調べてみると「景色，風景，景観」とある．しかし筆者は英語の「Landscape」と日本語の「景観」が同じ意味で使われているとは思えない．今日の日本で使われている「景観」と米国の「Landscape」は何が違うのか．

「景観」がある地域の立面の眺めなのに対して，「Landscape」はある地域を上からみた眺めである．言い換えれば前者は人から見た立面像であり，後者は鳥から見た平面像である．「景観」がカメラで撮影された範囲だけを対象にしているようなイメージを有しているのに対して，「Landscape」はその背後にある土地の広がりを明らかに含む概念である．また，「景観」には「Landscape」の持つ時間的な広がりの概念がない．「景観」がある瞬間のシーンを切り取ったものであるのに対して，「Landscape」は，自然がヒトの利用によって変化してきた結果としての土地利用を表しているともいえる．

フォーマン（Forman）ら（1986）の「Landscape Ecology」のように米国ではLandscape分野と生態学が合体した形で発展してすでに久しい．ちなみに筆者の研究室の名称である「ランドスケープ・エコシステムズ（Landscape Ecosystems）」とは，生態系を土地の広がりと直結したランドスケープ概念としてとらえる，という意味である．日本では，生態系をとらえる際，それを構成する要素間の関係に重きを置くあまり，それがどこにどれぐらい存在するのか，という現実の土地の広がりと直結した情報（実はこれが自然環境保全政策上もっとも肝腎なところであるのだが）についてはあまり顧みられてこなかった．

ヒトの好む「景観」，好まない「景観」

ところで，ヒトはどのような景観を好み，どのような景観を嫌うのだろうか．また，そうヒトが感じることに何か意味はないのだろうか．

英国の地理学者のジェイ・アップルトン（Jay Appleton, 1996）は，ノーベル賞を受賞した動物生態学者のコンラッド・ローレンツ（Konrad Lorenz）の影響を受け，「ヒトはどのような景観を好み，それは何故か」と自問し，「その景観に表現されている環境が，ヒトが生存しやすい条件を整えているから」と自答している．その理由として「鳥類がハビタットを選ぶ際，ハビタットの景観的特徴に着目しているように，ヒトもまた生まれつき自然環境を直感的に認識する傾向があり，ヒトのハビタットの景観的特徴に対して喜びや満足を感じ，そうでない場合には不安や不満を感じる」と述べている．

また，景観学者のエルビン・ズーベ（Ervin H. Zube, 1980）は，フォトモンタージュを用いた実験で，水のある景観は水のない景観よりも総じて評価が高かったことから，「景観資源の最高のものは水である．どんな景観でも水が入れば，その景観評価は必ず上昇する」と，景観にお

ける「水」の重要性を唱えている（進士，2005）．水はいうまでもなく，ヒトを含む生物にとって必要不可欠なものである．ズーベの「水」理論はアップルトンの「ハビタット」理論と整合している．

ところで，海沿いの旅館に泊まったときなど，部屋の窓から一面に海面が見える場合と，海辺がカーブを描きながら地平線と水平線の向こうに消えているような場合とでは明らかに後者の景観が好ましいと感じるヒトが多いのではないだろうか．ヒトは水を必要とするが，水だけの景観より「水辺」即ち水域と陸域の境界が含まれた景観を直感的に好むのではないか．水辺は生態学的に「エコトーン（Ecotone）」と呼ばれている異なる生態系の境界である．エコトーンは生物多様性が高く，生産性も高い．ヒトは，景観のなかのエコトーンを直感的にかつ瞬時に読み取り，その状況によって当該景観のハビタットとしての適性度合いを判断しているのではないか．景観評価にこのようなエコトーンの分析を応用できないだろうか．

「景観」の語源と今後の「景観アセスメント」

最後に，「景観」という語はれっきとした日本語だと信じている方が多いと思われるが，実は明治時代に植物学者の三好学がドイツ語の「Landschaft」の翻訳語として作った造語である（辻村，1937）．独語のLandschaftは，英語ではLandscapeである．つまり「景観」はもともと「Landscape」と同じ概念であったが，時代とともに本来の意味から乖離していき，結局，現在のような見た目だけの表層的な意味で使われるようになったのではないか．筆者は，エコトーンを含む，ヒトのハビタットとしての適性度合いこそが景観の最重要な判断基準になるべきだと考えている（自然景観以外の都市景観，人工景観においてもこの判断が当てはまると考えている）．

以上をふまえると，今後，景観保全を目的として景観評価を行なう場合には，その語源であるLandscape同様，空間的広がりや生態系を含んだ概念としてとらえ，その評価においては空間的および時間的広がりや生態系を考慮することが望ましいのではないか．こんなふうに考えていくと，景観アセスメントにHEP（ヘップ）を応用し，景観の「質」（＝眺め）だけではなく，空間量や時間の流れの概念を含めて総合的に

評価する，という新しい景観評価および景観保全の方向性が見えてくるような気がするのである．

ということで，結局いつものHEPの話に戻ってしまった．